【甲状腺治療薬について】

甲状腺治療薬は、甲状腺ホルモンの過剰による症状（バセドウ病）をやわらげるものと、甲状腺の障害（橋本病）や手術などにより不足している甲状腺のホルモンを補う薬があります。

バセドウ病には、抗甲状腺薬（メルカゾールとチウラジール）を使います。抗甲状腺薬は甲状腺ホルモンが作られるのを抑えます。甲状腺の中に貯まっている過剰なホルモンが全部なくならないと効果が現れてきませんので、薬が効き始めるには少し時間がかかります。抗甲状腺薬の副作用で多いのはかゆみや蕁麻疹です。頻度は少ないですが、非常に気を付けなければいけないのは顆粒球が減ることです。顆粒球は細菌を攻撃する働きがありますので、顆粒球が減ると細菌により発熱や喉の痛みが起こります。知らないで薬を飲み続けると大変危険です。また、筋肉がつることもありますが、これは薬が効きすぎている症状です。薬を減量すると治りますが、必ず医師の指示に従い服用して下さい。β遮断薬（テノーミン、インデラル等）は、バセドウ病などの動悸、手のふるえなどに使います。抗甲状腺薬が効いてくるまでの間、症状をとるために、最初の1～2ヶ月使います。

橋本病などの甲状腺ホルモンが低くなる場合には、甲状腺ホルモン剤（チラーヂンS、甲状腺末等）を服用します。服用を始めてすぐに効果が出るものではありません。必要量より多く飲みすぎると、甲状腺機能亢進症の症状が出て動悸、頻脈、体重減少などの副作用が起こります。このような症状が現れたら医師に相談してください。

（薬剤師　湊本　康則）

【甲状腺の病気と食事】

ヨードから作られる甲状腺ホルモンの分泌が高くなる状態を**甲状腺機能亢進症（バセドウ病）**と云います。代謝機能が高まり体重減少を起こしやすい消耗性疾患であることから、食事で注意することは①消費に応じたエネルギーの摂取：特に高齢者では食欲不振を伴うこともあるので不足分のエネルギーやたんぱく質を補う内容にします。②ビタミン、ミネラルの補給：水溶性のビタミン(B群、C)やビタミンAの需要が増えていますので不足のないようにします。カルシウムの摂取も多めにします。③ヨード制限：甲状腺ホルモンの材料となるヨードは、海藻類のなかでも「昆布」と「とろろ昆布」に大量に含まれています。したがって他の海藻類のヨード含量は少ないため、一般的には海藻類を制限する必要はなく「昆布」を多量に連続摂取することを避けるのみでよいと云われています。しかし昆布自体がなくても市販の昆布だしや味噌、しょうゆ、酢などにも多く含まれているものがありますので注意しましょう。④十分な水分の摂取：代謝機能の高まりにより不感蒸排泄、発汗が増しているので脱水に注意します。⑤アルコールを控える：甲状腺ホルモンが高くなると肝機能に影響するのでアルコールの摂取は避けた方がよいでしょう。

また甲状腺ホルモンの分泌が低くなった状態を**甲状腺機能低下症（橋本病）**といいます。肥満、高脂血症などがある場合はエネルギー過剰にならないために主食、菓子、果物などの摂取に注意します。貧血などの合併症がある場合はその食事療法を行います。

（管理栄養士　浅井　和子）

くす通信

第76号
2005年9月1日

甲状腺の病気
甲状腺治療薬について
甲状腺の病気と食事

くす（樟）は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし（薬師）とは、医師のことを指し、くすしぶみ（薬師書）は医術に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。

気楽に読んで健康を守りましょう。

診 療 時 間　8：30～17：00
（診療受付時間 8：30～11：00）

ただし、**急患はいつでも受診できます。**

（診療科目）**総合医療ｾﾝﾀｰ**［総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科（腎センター）、神経内科（脳神経センター）、呼吸器科（呼吸器センター）、］**心臓血管ｾﾝﾀｰ**（循環器科、心臓血管外科）、**消化器病ｾﾝﾀｰ**（消化器科）、精神科、神経科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科（脳神経センター）、皮膚科、形成外科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器ｾﾝﾀｰ**（眼科、耳鼻咽喉科）、気管食道科、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ科、**画像診断・治療ｾﾝﾀｰ**（放射線科）、麻酔科、歯科・口腔外科、**救命救急ｾﾝﾀｰ**、人間ﾄﾞｯｸ、脳ﾄﾞｯｸ

総合医療センター
診療科の特色：内分泌・代謝内科

専門的な診療や教育を行う病院として学会より糖尿病認定教育施設および内分泌・代謝認定教育施設に認定されています。私たちの内科では**糖尿病**や**甲状腺**の病気を多く治療しています。**糖尿病**は、しびれ（神経障害）、むくみ（腎症）、目のかすみ（網膜症）といった特有の合併症に加え、脳梗塞や心筋梗塞などが起こりやすくなります。病気の起こりはじめにはあまり自覚症状がありませんので軽く見られがちですが、合併症予防のためにはこの時期からの治療が大切です。正しい病気の知識を身につけ、いい血糖コントロールを維持できるように心がけて下さい。一方**甲状腺の病気**では、甲状腺が大きくなったり、甲状腺ホルモンが高くなったり低くなったりしてきます。詳しい説明を次に書いていますのでお読み下さい。

【甲状腺の病気】

甲状腺の病気の特徴は、甲状腺が大きいこと（甲状腺腫）が外からわかることです。これには甲状腺全体が腫れてくる場合（びまん性）と甲状腺の一部が大きくなってくる場合（結節性）の二つがあります。

びまん性では、バセドウ病や橋本病などの病気を疑います。

バセドウ病は甲状腺ホルモンの値が高くなってくる病気です。甲状腺に対する抗体（TSHレセプター抗体）ができることが原因です。**症状は**、甲状腺腫、目が大きくなる（眼球突出）、手がふるえる、脈が速くなる、暑さに弱くなる、体重が減る、精神的に不安定となるなどです。検査では、甲状腺から出てくるホルモン（T4、T3）が高くなり、下垂体から出てくる甲状腺刺激ホルモン（TSH）が低くなります。

治療としては内科的治療、外科的治療、放射線治療の三つがあります。どの治療にも一長一短がありますが、もっとも多く用いられている方法は内科的治療です。これは内服薬で甲状腺ホルモンの合成をおさえて甲状腺ホルモンの値を正常にする方法です。この治療では、1,000人に1人ぐらいの頻度で白血球が減少することがありますので注意が必要です。

橋本病は甲状腺ホルモンが低くなる病気で、顔が腫れぼったくなり、体がだるくなり、寒がりとなります。血液中のT4やT3が低くなり、TSHが高くなってきます。**治療は**不足した甲状腺ホルモンを薬で補充することです。なかには昆布の取りすぎで甲状腺ホルモンが低下していることがあります。これは昆布のなかに含まれるヨードが原因ですが、昆布をやめることで甲状腺ホルモンは正常になります。

結節性では、**甲状腺腫瘍**が疑われます。この場合は、良性なのか悪性なのかが問題となります。甲状腺超音波検査で腫瘍が確認できれば、そこに小さな針を刺して、そこから細胞を取ってきて検査をするのが最も安全で確実な診断方法です。

（内科部長　東　輝一朗）

国立病院機構熊本医療センター

（前 国立熊本病院）

NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION KUMAMOTO MEDICAL CENTER

〒860-0008　熊本市二の丸1-5
電話　096（353）6501（代表）
FAX　096（325）2519

ホームページ　http://www.hosp.go.jp/~knh